林業技術センター
普及班便り
（第14回）

あなたの山づくりを応援する林業普及
いわての林業経営者【その5】
◆11歳からの山仕事と『一杯の醤油ラーメン』：

一　はじめに

今回から、2回に分けて一関市の素材生産業を経営する山田一宝さん（53歳）を紹介します。

二　その人紹介

(1)　物心付いた時には『山』にいた

山田さんは、素材生産業を営む父親に連れられて、幼少の頃から山仕事の現場に行っていました。見様見真似で「山仕事遊び？」、今でいう林業体験学習をしたことになったと振り返っています。それが11歳（小学校5年生）の時でした。

山田一宝さん

(2)　思い出に残る検知作業

その当時の思い出に残る作業は、手足がかじかむ寒い現場での丸太検知作業です。その作業の中でも刻印を打つ作業が一番の思い出に残っていて、作業休憩の焚き火のパチパチと音を出しながら燃える炎は今でも脳裏に残っていると話しています。

(3)　父親と一緒が一番楽しかった

当時は、日本が高度成長期の真っ只中で、父親の経営の中心は「電柱」用の丸太生産でした。丸太は伐っても伐っても売れた時代で、宮城県石巻・塩釜に納入していました。学校の休みの日が納入の日と同じ時は、早朝眠い目を擦りながら父親の運転するトラックに乗って行きました。父親と一緒にいる時が何よりも楽しかったと話す言葉には、何か胸にこみ上げるものを感じました。「父親の働く背中を触れて育った」その姿は、亡き父親の姿そのもの。今でも心の中の父親と一緒の山田さんでした。

三　後継者となるまでの経緯

(1)　山仕事に興味を持った：

幼児期には父親と離れた記憶がないと言うほどいつも一緒でした。父親は、作業を終えて山を降りると、山田さんをまっすぐ町の食堂に連れて行き、『一杯の醤油ラーメン』をごちそうしてくれました。それが何よりも楽しみで「山仕事遊び？」に行くようになり、山仕事に興味を持つきっかけにもなったのでした。「父親はそんな私を見抜いていたのだろう。深い愛情を持って山仕事を教えてくれた」と、当時を回想しながら話していました。

父親を思わせる働く姿の山田さん

(2)　高校卒業とともに

山田さんは、高校を卒業とともに、脇目も振らず、幼い頃からの夢でもあった父親と一緒の仕事を選びました。もっぱら父親の運転手として、山の買い付けに駆け回り、その中で今に役立つノウハウを身に付けました。今考えてみれば、「背中を見て覚えろ：」という後継者としてしっかりとした経営意識を身に付けてほしいとの父親の思いがあったのだろうと振り返っていました。

(3)　親から子へ

そんな父親も、平成6年、山田さんが39歳の時に他界されました。「何事も身を持って教えてくれた父親でした。自分の子供にも同じように伝えていきたい」と話す姿が印象的でした。

自ら働く姿を見せる山田さん

（次号へ続く）

林業技術センター　普及班